

## 第二回 静岡文化芸術大学薪能（公開講座／能面展）

研究の成果は以下

- 1 薪能プロジェクトチームの主体性
- 2 公開講座
- 3 学生の新作狂言創作活動への参加
- 4 静岡文化芸術大学薪能の固定客

学生で構成される「薪能プロジェクトチーム」の主体性

薪能研究の目的は、学生プロジェクトチームの主体性であり、それを引き出すことが最も重要なものの中の一つであることは言うまでもない。その成果は第一回と今回の薪能プロジェクトチームの実績が証明するものである。

公開講座

今回、公開講座を能と狂言に分けることにより、入門編と言いながらも地域住民の伝統への深い理解が得られたと思う。

また、公開講座は薪能公演の宣伝としても機能した。

学生の新作狂言創作活動への参入

今回は本学の学生から新作狂言の脚本を募集した結果、  
該当者は芸術文化学科3年：安藤楼欄と

同じく、芸術文化学科2年：左口 歩となった。

その脚本「養毛の仙人」は、和泉流狂言師の井上 祐一氏の

指導のもとに舞台化する作業行程を経て、実際に薪能で演じられた。

これが示すものは、静岡文化芸術大学薪能学長特別研究は、マネージメントと、それとは別にアートそのものの創作が平行して行われている研究だと言えるだろう。つまり本研究には、薪能プロジェクトチームの活動と平行して、それとは別のチームによる芸術的な創作が内包されていることを示す。

このように本学の学生が、薪能のアートマネージメントと同時に新作狂言の創作も手掛けたことは大きな成果と言えるだろう。

#### 薪能の固定客（リピーター）

今回確認できたことだが、第二回を迎えた本学の薪能は漸く固定客というものを獲得したと言えるだろう。

このことは薪能チームが作成した住所録にダイレクトメールを郵送したことにより明らかになった。

その結果、約250人が本学の薪能のリピーターであることが判明した。

これは薪能プロジェクトが浜松市民／県民に受け入れられ且つ応援されていることを示唆していると言えよう。

このようにアンケートの内容や固定客の存在が示すものは、本学の薪能がアートマネージメントとして、且つ芸術面としても成功を納めたことを意味するであろう。